



TITLE:

精巢の研究をめぐって(随想)

AUTHOR(S):

久保田, くら

CITATION:

久保田, くら. 精巢の研究をめぐって(随想). 泌尿器科紀要 1970, 16(10): 563-564

ISSUE DATE:

1970-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121182>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 16 巻 第 10 号

1970年10月

随 想

精 巢 の 研 究 を め ぐ っ て

東京女子医大教授(解剖学) 久 保 田 く ら

このような題をいただき、冷汗三斗の思いをいたしております。たしかに長いあいだ同一器官を研究の対象としておりますが、自分で描いた夢も果しえず偶然みた細胞に心を奪われて当初の目的からはずれにはずれ、横道にはいりこみ、その横道でまたまた解決のメドがつかかねている始末ですので、研究は遅々として進まない状態、まことにおはすかしい限りでございます。

今は故人となった慶応義塾大学の谷口教授から、「久保田の Hoden はちっとも進展しない」と一喝され、反論できないほどゆきなやんでいた時もございます。また、「まだあれやってるのか」という質問もたまたま頂だいいたしますが、不勉強の私にはわからぬことだらけでございます。

1939年の春、母校を後に、慶応の解剖に伊東俊夫先生の門下生として入室、先生から直接ご指導をいただき、まことにしあわせな助手生活であったのですから落着いて、先生のおっしゃるとおりにおとなしく勉強していればよいものを若いときは無鉄砲なものでヒトの染色体を研究したいと思い立ち、もちろん伊東先生にも教室の方にもいっさいご相談もせず、ひそかにヒトの精巢を集めることをはじめました。その当時も Hoden の手術はあまり多くはありませんでしたので存じあげない先生にも心臓を強くしてお願いにあげました。「何時に手術」とのおしらせをいただき新鮮なものをほしい心で矢も楯もたまらないのに助手の仕事ははずせない、指定の時間に出にくい、タクシーにもそう遠くまで乗るわけにゆかない、どうしたものかと心を痛めたこともたびたびございました。ところが自分では「ひそかに」のつもりが、先生はさすがに全部をお見通しであられました。その後、ご旅行をされ、固定と水洗とをすませた Hoden をアルコールに保存、「久保田君おみやげがある」と、私にくださいました。1945年戦火の東京から県立秋田女子医専に赴任のときもパラフィンに包埋した先生のおみやげを身近に持参いたしました。パラフィン用ミクロトームのメスをとぐこと等を昼休みをさいて、覚えるまでお教えくださる温情の半面、先生はまことにきびしく、マロリー染色になかなかOKが出ず、百枚ほども切片を切ったあげくようやくまあまあとお許しをいただいた覚えがあり、いまでもそのときの標本を幾枚かもっておりますが、ツエロイデン包埋のヒトの Hoden の半分と膜をも一部つけて

ある切片でした。

この器官は染めにくく切りにくい器官であり、染色時間などにも個体差があり、めんどろな染色法にとりかかると夜半教室に私ひとりになってしまうことがあり、研究室の同人がたまたまいっしょにつきあってくれましたが、ある夜、あやまってクローム硫酸をこぼし背広がボロボロに切れるというひどい目に合わせたこともありました。その時分は自分のことで精一ぱいであったのか、この方にもわびる機会をいまだにつくっておりません。当時材料をくださったご親切に一片の礼状も差し上げていないことなどを省みて、お申しわけないことのみであります。若気の至りとお許しいただけるかどうか、いま一人静かに感謝の意を表しております。

ある年、医学関係誌の記者に面会を断わり、アエツ女だてらに変な研究をしてパチが当りチンパを引いている、と書かれ当惑いたしました。本人は、水虫で靴もはけずに弱っている夏の日のことでした。しかしいま私の教室で串田助教授はじめ研究生などが電顕でHodenをみておりますが、悪態を書かれたとは聞いていない。私の人間性のしからしむるところか、時代の差であるか。さて集まった標本は年令的にかなり幅のあるものとなりました。中にはきわめて正常を欠くものもございますが、しかし正常との比較に非常に役に立ち、したがって、総じてみな必要かつ大切な標本のみでございます。研究のために人にいささかでも不利を与えたとしたら、どんなにいい研究をしようとも医道に反するし、その後どんなにつくしても与えた不利をあがなうことは不可能であると考えるので、ただくださるものを待つのみでございます。

そろそろ胎児を集めはじめていたころ、いっぽうでパラビオーゼの実験をいたしておりました。胎児、パラビオーゼともに精細胞の中に巨大細胞が認められ、両巨大細胞は種々の点でよく似ておりますので、私はホルモンに関するしかるべき腺や器官の摘出、各種の注射薬の注射および実験動物に環境の変化を与えるなどの諸実験をつぎつぎに試みてみました。ところが、胎児やパラビオーゼにみるような単純な巨大細胞とは全く異なり、精細胞は刺激にすみやかに反応して細胞は破砕され、破砕された細胞が集まり集まってぶくぶくと泡を思わせる大きな細胞が形成される。与えた刺激をのぞけばやがて細胞も組織ももとにもどるのであります。

万一、この細胞が「もと」にもどらなかったとしたら私は多分いわゆる巨大細胞などと面倒な名をかけてに、一人で名づけたりはしなかったと思われるし、自分の本道からはずれてまでこの細胞にうつつをぬかすことはなかったかと考えます。いついかなる実験のさいにも精巢には巨大細胞が現われることはおもしろい事実とは思いますが、まるでだっこでもだいているような気もいたします。

かつて、卵巣を精巣と同一条件のもとに実験をいたしましたら、いっこうに変化をみせず、いったん変化したとなるとなかなか回復しなかった。これまでの事実から精巣の敏感に敬意を表しますが、「女心と秋の空」を書き換えていただかねばならない、との感想をももつのでございます。

そして本文のはじめにも書きましたがわからぬことをスカッと解明することができたら、どんなにスカッとするかと存じ、もたもたいたしております私に何かとご教示くださるようお願いいたします次第でございます。